Hi！ アンドレです

社会教育指導員
アンドレ・エスタニスラオ

7月は私にとって特別な月でした。まず1つ目に「中学生の翼」事業の準備のため慌しかったこと、2つ目に私がここ小野町に来て1年目を迎えたという理由からです。いつも私の支えになってくれる小野町の皆さんに改めて感謝します。私は、町の英語と国際交流を指導、支援するために更に小野町に滞在できることを皆さんにお知らせできて、とてもうれしく思います。

今年の「中学生の翼」も無事成功に終わりました。全ての団員がグレンロックとニューヨークで充実した時間を過ごしました。最初の2日間は小雨が降ったり曇ったりでしたが、残りの8日間はとても良い天気でした。団員や私たち指導員は、懸命に事前研修に取り組みました。団員は英語だけでなく日本とアメリカの文化の違いに関する授業も受けました。食べ物について、シャワーの使い方、ベットメイキングの仕方など・・・。研修期間中、団員は英語の練習を十分行えたと思います。そして帰国後、団員の英語力が向上していると、私は感じました。

グレンロックと小野町の交流が今年で15年目を迎えたことはとても印象的です。さらに印象的なことは長期間にわたる研修にも関わらず、団員が常に熱意と活力を見せていたことです。今回ホストファミリーの大部分が新たに受け入れしていただいた家族でしたが、いくつもの研修プログラムに参加していただいたうえに、全員送別会にも出席してくださいました。15年前に小野町の社会教育指導員であったクリスティン・オブライエン氏が、この事業に対して深い愛情を注いでいるからにほかありません。しかし、私がこの事業で最も重要であると思うことは、子どもたちに国際的な理解と協力の意味を教えるということです。研修は、互いの文化についての考えを交換することで、他国の歴史や伝統に対する理解を深める重要な機会です。現在起こっている国際間紛争解決のためには、このことが大変重要です。私たちは平和を守らなければなりません！

ふるさと小野町会 ふれあい通信

セピア色の青春

見留 辰雄
（小野山神出身）

昭和36年5月、新聞広告の求人メモを片手に上京しました。身寄りのいない東京に、十六、七歳の息子が行くことに、心配で母親は泣いておりました。でも当時で千五百円ほどを持たせてくれました。

上野駅に着くも、キョロキョロしていた少年の姿に、不審に思ったおまわりさんは「家出人」と見たらしく補導されました。就職先の住所メモを示しながら説明したところ、住込先までパトカーで送り届けてくれました。昨今では考えられないことです。

当時は「金の卵」と呼ばれていた時代です。しかし、仕事は辛く、茨城出身の同僚と一緒に、住込先から家出し、上野駅へ行きました。ですが「ハタと困った・・・。」田舎へ戻る訳にもいかず、泊まる所とて無く、少年2人の知恵はここでストップ、仕方なく詫びを入れて住込先へ戻りました。あの昭和30年代の懐かしいひとコマです。

当時、給料は4千円でした。

このことがきっかけで、サラリーマンを続けるならば大企業で、との考えから転職し、その後42年間勤めて定年を迎えました。バブル期を支えた年代ゆえ、働け働けとすごした次第です。

退職後疎遠になっていた友との友情が復活し、小野町会に入会しました。支部の親睦会や総会出席の折お会いする方達は、ご近所出身だったり、学友の弟妹だったり、昔知り合いばかりで楽しい語らいをさせてもらい、うれしい限りです。

現在は再び仕事をしているものの、以前と比べると充実した毎日を過ごしております。こうした日々があるのも、ふる里小野山神があってのもの、小野町は私にとって大切な大切な心の支えです。地元を守ってくださっている町民の皆様方に、深く感謝申し上げます。